

令和6年(2024年)秋における外来魚稚魚生息状況調査結果

山本充孝・大植伸之・孝橋賢一

1. 目的

2024年秋季の外来魚（オオクチバス・ブルーギル：以下、バス・ギル）当歳魚の生息（発生）状況を琵琶湖沿岸域での定点調査により把握する。

2. 方法

2024年10月18日から11月6日にかけて、琵琶湖沿岸域（水深7m以浅）の56定点（北湖36定点、南湖20定点）において、小型ビームトロール網（ビーム長4m）を小型動力船で曳くことで実施した。曳網速度は0.27m/秒を基準とし、北湖では5分間、南湖では3分間曳網した。採捕魚の体長組成から、バスでは標準体長150mm未満（北湖、南湖）、ギルでは標準体長80mm未満（北湖）、70mm未満（南湖）を当歳魚として、その生息密度（曳網面積1haあたりの採捕尾数）を算出して、2007年以降の結果と比較した。

3. 結果

バス当歳魚の生息密度は北湖では過去2番目の低水準であった2023年から大幅に増加した{248尾/ha（前年比347%）}。一方、南湖では昨年から大幅に減少した{237尾/ha（前年比19%）}（図1）。

ギル当歳魚の生息密度は北湖では前年比87%の319尾/haとやや減少したが、南湖では昨年からは大幅に増加し、510尾/ha（前年比197%）であったものの、2017年以降は低水準で維持されている（図2）。

近年、バス当歳魚の生息密度が高水準になることがあり、生息量がギルと同程度または上回る傾向がみられている。¹⁾ 今後、いかにバスの生息量を抑制するか、当歳魚の発生状況にも注目しながら検討する必要がある。

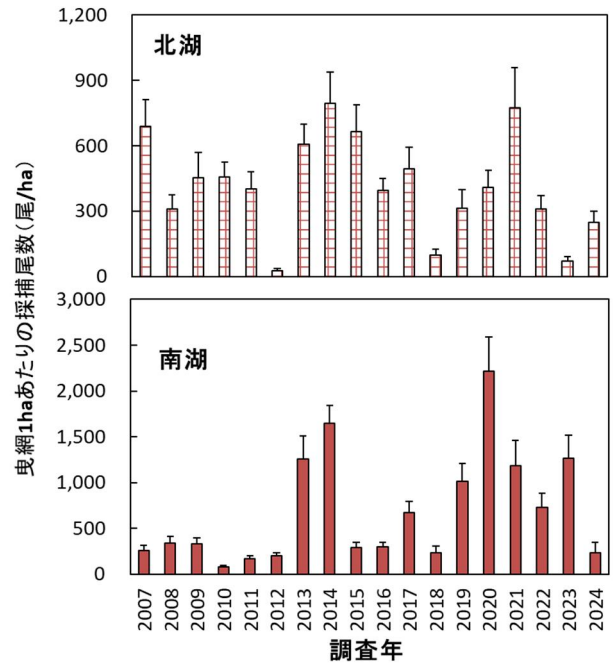


図1 曳網1haあたりのオオクチバス当歳魚採捕尾数の経年変化（エラーバーは標準誤差）

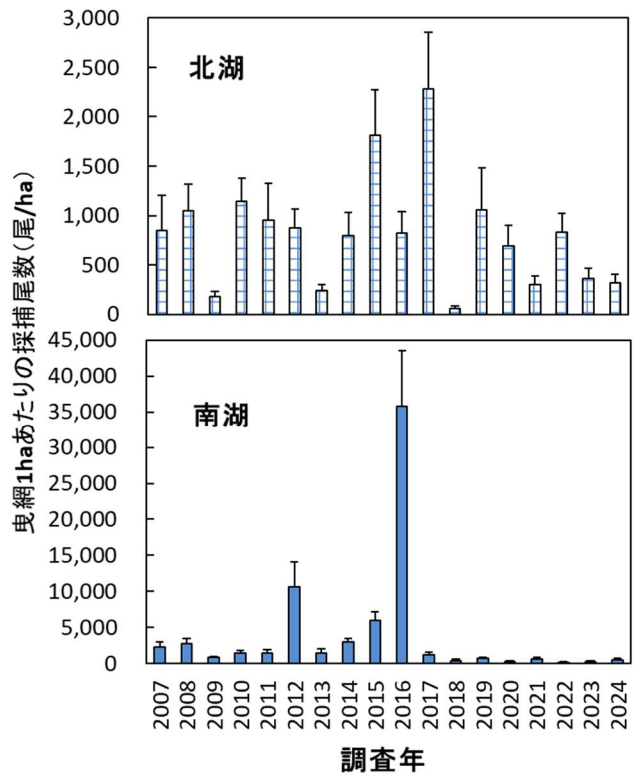


図2 曳網1haあたりのブルーギル当歳魚採捕尾数の経年変化（エラーバーは標準誤差）

引用文献1) 本報告中の「令和6年度（2024年度）当初の琵琶湖における外来魚生息量の推定」を参照。